

の組織と運動による自治体への要求や、抗議を続けている。これは高度成長政策がつくり出した、新しい地域社会＝都市化の中で生きる住民の、自衛力のあらわれではなかろうか。

元来、都市は因習とか伝統とかよりも、より多くの人間のため、が強調される社会だ。人間の自由や、権利が、何よりも尊ばねばならない。都市は、人間の“自由と権利の誕生の場”ともいわれる。都市には、人間尊重の精神が満ちていなければならない。人間と人間性の復活、都市にいま必要なものはこれではなかろうか。人間喪失の都市に、文化の芽生える種があるだろうか。そしてこれからの文化は、広域的な社会の中から、そこに住む多くの市民の中からつくられてゆくのではあるまいか。住民運動も市民のつくりだしたひとつの“文化”といえないだろうか。

横浜文化論

## よそ者のみた横浜文化論



辻村 明

<東大新聞研究所助教授>

### I——まえがき

社会の近代化とともに、地方文化は崩壊しつつあるようにみえる。そしてそれはやむをえない時代の趨勢だとして、これを承認する立場と、いやそれが時代の趨勢だからこそ、何とかそれに抵抗して、地方文化の保存に努力しなければならないという立場とがある。私は結論的にいって、後者の立場に加担するのだが、それにはいろいろの理由があげられる。生まれ故郷である浜松という土地に愛着をもっているという個人的な理由もあるし、居住地への愛着や定着の喪失が現代人の大きな特徴であり、こうした「根無し草」が大量に作り出されていることが、現代大衆社会の最大の病理だという社会学的な診断も含まれている。しかしいずれにしろこうした立場は、時代の流れに逆らうのだから、現実的にはどうしても弱い立場に立たされる。最近NHKでも、「ローカル番組の充実」という基本的な問題が課題にされ、私もその研究に参加しているが、地方文化保存論の立場から、「放送と地域性<ローカリティ>」<NHK『放送文化』1965年10月号および11月号>について書いたところ、非常に多くの反論が寄せられた。そして反論の骨子は、要するに私の立場は時代の流れを無視するアナクロニズムだというので

ある。それに対する反ばくは、ここではさし控えるが、ともかく、地方文化保存論は少数に属するようである。

では、そんなに地方文化に愛着をもっているならば、現在住んでいる横浜についても、「横浜文化論」を展開するだけの十分な材料があるだろうと期待されると、これは残念ながら、「否」と答えるをえない。というのは、私はハマッ子ではないし、横浜に住んでやっと10年、横浜に対しては要するに「よそ者」であって、横浜に対しては何らの愛着も感じていないからである。その意味で、私が本稿を執筆するのは甚だ適任でないのだが、「よそ者」の見方も、何かの参考になればと思っておひきうけした次第である。

## 2———地域社会の個性

横浜の最大の悩みは、東京の衛星都市になってしまい、横浜の個性が失われ、横浜への市民の愛着がなくなりつつあるということである。そしてそこから脱却するためには、個性的な文化の創造と、それへの市民の参加が必要であることはいうまでもない。だからこの特集でも「新しい横浜文化の創造は可能か」ということが問われるのである。しかしその場合、「文化」ということの内容には、いくつかの側面を区別していかなければならないだろう。

たとえば、土木事業の推進や生活環境の整備といったことも、便利な生活や快適な生活を保証するものとして、文化の側面と考えることができる。しかしこうしたものは、地域社会の個性を発揮させるうえでは、あまり有効な要素にはならない。もちろん土木事業の推進度や生活環境の整備度くたとえば、道路舗装率とか便所の水洗化率など>は各地域社会ごとに違ってはいるが、そうし

た違いは単なる「地域差」であって、「地域社会の個性」というようなものではない。もちろん日本全国のほとんどの都市で、たとえば、便所の水洗化率が30%程度であるとし、横浜市だけが仮りに90%~100%という異常な高さを示したとすれば、これは「横浜の個性」といえるかも知れない。そしてそうした地域社会の魅力や快適な日常生活の魅力で、住民が横浜市に愛着を感じ、横浜市に集まってくるかも知れない。しかしこれとて、他の都市が次第に水洗化率をあげてくれば、早晚差違は縮少し、「横浜の個性」は影が薄くなる性質のものである。結局、土木事業や環境の整備など、いわば物質文化の側面は、いくら強力に開発が進んでも、それは地域社会の個性を確保するものにはなりにくいのである。もちろん、だからといって、そうした物質文化の開発が無意味だということではない。便利な生活や快適な生活のために、大いにやらなければならないことである。だがそれだけでは、横浜の個性の喪失や、衛星都市の悩みを解消することにはならないのである。いくら「住みよい横浜」をうたい、良好な環境の整備状況を写真で展示してみても、それは横浜市民の市民意識を高めることにはならないのである。

単なる「地域差」ではなくて、本当の意味での横浜の個性を発揮させるものは、やはりもっと積極的な精神的な文化以外にはありえない。そしてそうしたものはそう簡単にはでき上がらないのだから、新しく育成していく場合には、長期間かかる覚悟が必要であるし、長年の歴史を経て伝わってきたものに対しては、謙虚な気持ちで対さなければならぬだろう。目先の利害にとらわれて、単に古きが故に、無用の長物扱いしてはならないのである。

では横浜の個性を発揮させるそうした精神文化には、どんなものがあるだろうか。実はそこが最も

肝心なのだが、残念ながら「よそ者」にはその所がよくわからない。やはり横浜に生まれ、横浜に育ち、横浜に愛着を感じているハマッ子が、横浜の伝統を掘り起こして、それを新しい横浜文化の育成につなげていくより他ないだろう。ただその場合の参考として、「よそ者」の見当外れの空想も、何かの足しになればと思って、あえて筆を進めていく次第である。横浜の場合をとりあげるまえに、もしこれが私の故郷である浜松だったならば、私ははたしてどんな回答をするだろうかを少し考えてみたい。というのは、私も浜松についてならば、多少ともその個性なり特殊性なりを知っているし、愛着ももっているのです、問題を具体的に考えていくことができるからである。

### 3——もし浜松市長だったならば

私が浜松に愛着を感じずの一つの大きな理由は、おそらく子どものときに、凧揚げ祭に参加したためであろう。この凧揚げ祭は5月の節句の5日間、各町毎に6畳敷、8畳敷といった大きな凧を揚げ、切り合いをやって勝敗を決するのである。凧のマーク<模様>も町毎に伝統的に決っていて、ある町は輪つなぎ、ある町はおかめの面、またある町は鳩の絵、といった具合で、若衆や子どもの着るハッピーも、町毎に模様が決っている。夜にはまた町毎に山車があって、その飾りつけもさまざま、夜遅くまで市の目抜き通りを練り歩くのである。おそらく町の数が100ぐらいあるだろうから、その壮観たるや、まさに想像を絶するものがある。この伝統的な行事は、廃絶するどころか、近年ますます盛んなようであるが、こうした全市をあげての町毎の対抗競技は、単に子どものときの楽しい思い出というだけでなく、市民意識の高揚や地域社会への愛着を培養する重要な手段にな

っている。確かに町毎の対抗競技であるため、町のエゴイズムが露骨にあらわれたり、若衆たちの喧嘩もたえないという問題はあるが、余暇といえば自家用車で、家族だけでエンジョイする家族エゴイズムの横行している現在、子どもを家族からひき離して、もう一つ大きな集団である町とか市とかの共同の行事に参加させることは、地域社会への愛着を培養するだけでなく、共同生活のモラルを培養することにもなって、教育的な意味も決して少なくない。

凧揚げ祭は、古くからの伝統ではあるが、これは「根無し草」の大量に発生した現代大衆社会にも、生かされるべき非常に賢明な行事といえる。浜松には、幸いにして、このようなすばらしい行事が残っているが、もしそうしたものがなく、何か新しいものを作りだして、市民の参加を確保していかなければならないという場合は、それは大変にむづかしい。横浜の「港まつり」がどのようなものであるのか、私は全然知らないが、日本の町であれば、必ずやかつては一般市民が参加した古い伝統や行事はあるだろうから、そうしたものをうまく利用して、新しい市民の参加を確保していくための工夫が必要である。浜松には幸いにして、市民の参加を確保している伝統的な行事があるが、もしも私が浜松市長であったならば、他にもいろいろと、浜松の個性を発揮する方法を考えるであろう。たとえば、浜松には楽器産業とかオートバイ産業とか、非常にユニークな産業が多いし、かつての浜松高工（現静岡大学工学部）は高柳式テレビの開発などで権威が高かったし、近代産業や近代技術の面でも、浜松はいくつかのすぐれた特徴をもっている。個性を発揮する場合、何も古い文化にばかり固執する必要はないのである。そこで考えることは、夢物語りかも知れないが、日本楽器や河合楽器をはじめ、多数の楽器会社に働きかけて、世界に冠たるシンフォニー・ホ

ールを作るのである。そしてカラヤンのベルリン・フィルハーモニーも、日本にきたときには、東京から名古屋へ素通りしてしまうのではなく、どうしても、浜松のシンフォニー・ホールで演奏せざるをえないような伝統と権威とを作りあげるのである。あるいはさらに、市内の小中学校での音楽教育は早くから進んでいるので、ゆくゆくは群馬交響楽団のような浜松の学生オーケストラを編成することも、あながち不可能ではないだろう。ともかく楽器産業という基盤があるのだから、それを生かした個性的な文化を培っていくべきである。日本楽器には調律のベテランがいてフランスのコルトーも来日したときには、東京での演奏に、わざわざその人を浜松から呼んだといわれる。他にも徳川家康にちなんだ故事とか名物のウナギなど、いろいろと特色はあるが、よその市のことはこのくらいにして、次に肝心の横浜について考えてみよう。

#### 4——もし横浜市長だったならば

横浜の最大の個性は、何といても港であり、港を媒介にしての外国文化との交流である。だから「港まつり」を盛大にやるのは当然である。しかし現在の「港まつり」は、はたして一般市民の参加を、どれほど確保しているであろうか。私は「よそ者」で関心がないためかも知れないが、いまだに見たことがなく、実情は知らない。こうした無関心の一つの理由として、やはり横浜市が巨大になりすぎて、周辺に住んでいる人間には、そうした行事にもおいそれと参加できない事情にあることも考えて欲しい。〈これは戸塚の住人の特殊性かも知れぬ。実は戸塚まで横浜市に編入されていること自体、そもそも横浜市の一体性を確保するうえで、地理的・物理的に無理があるように

思われる。横浜市としてのまとまりや一体性を確保したいと思うならば、むやみに町村合併をして拡大していくことは慎むべきである。〉仮装行列を見に、わざわざ伊勢佐木町まで出かける気がしないし、ましてや子どもたちや一般市民が、直接その行事に参加するチャンスなどは開かれているのだろうか。浜松の凧揚げ祭であれば、それのおこなわれる旧練兵場まで、市のどこからでも簡単にいけるし、現場にいかないまでも、高く揚った凧は、屋根に上って望遠鏡で応援観戦することもできるのである。そのうえ子どもたちは、単なる見物人としてではなく、実際に参加して、若衆の指揮のもと、ワッショイ、ワッショイと、糸をたぐる手伝いをするのである。文字通り全市民をあげてのお祭といってい。横浜の「港まつり」が、はたしてこれほどの市民の参加を確保しているかどうか疑問に思われる。もしそうだとすれば「港まつり」にも、もっと市民の参加を確保するような工夫があってもいいように思う。「港まつり」には、横浜港の見物や、練習船日本丸の公開など、港での行事もあるようだが、当日は港を市民に開放して、町とか区とかの対抗ボート・レースをやるとか、何か水上のショーをだし物にして、観衆としてでも市民が多数参加してくるような工夫があってもいいだろう。

あるいは無理に港に結びつけなくとも、港を媒介としての外国との交流ということに重点をおいて、外人チームと日本人チームとの野球大会というようなことも考えられる。明治の昔、横浜港に上陸したアメリカ軍艦デトロイト号の乗組員と、当時の一高生との野球試合は、おそらくは日米野球戦のはしりだっただろうが、それにちなんで、小学生、中学生、高校生、大学生、一般市民といったチーム別に、外国人チーム（世界各国）と日本人チームとが試合をして、交歓することができれば面白い。しかもそれを横浜の年中行事として、

甲子園の高校野球や六大学のリーグ戦に匹敵するような名物に仕立てあげれば、外国との交流ということで、横浜の個性が大いに発揮されることになるだろう。

それは何も、スポーツの競技に限る必要はない。外国に関する情報の蒐集とか研究とかの面でも、横浜にすばらしい研究センターができれば、横浜の個性が大いに発揮されることになるだろう。全世界の国々を対象としたのでは大変だろうから、最初は特に横浜と関係の深い国から始めていけばよい。たとえば南京街との関連で中国に限定するとか、あるいは最近ではナホトカ航路でソ連船が横浜に入港するので、ソ連に限定するとかして、順次拡げていけばいい。ナホトカ航路の従業員による本場のロシア民謡をきかせる場所を作ったり、あるいは日ソ貿易やシベリア開発も具体的な日程に上がっているのだから、そうした方面の研究・情報センターを作るとか、あるいはさらに、横浜市立大学にそういった研究所を設置するのも、横浜の個性や独自性を発揮することになるだろう。何も革新市長だからといって、中ソに偏る必要はない。西側の諸国とも、特に深い関係のある国を選んでいけばいいのである。あるいは特定の国に限定しなくても、「文化の交流」ということ自体を、あらゆる面から研究する研究機関があってもいいように思う。ソ連関係の研究機関は、日本の大学ではわずかに北海道大学にスラブ研究所があるだけだし、文化交流についての研究機関も、やっと東大文学部に、今年度から研究施設が認められたような状況である。港を機縁にしての外国文化との交流という面で、横浜の大学にユニークな研究部門を設置していく余地は、大いに残されているように思われる。国立大学ではそれもなかなかむつかしいだろうが、市立大学であれば比較的やり易いではなかろうか。しかもそれは横浜というローカルカラーに立脚しつつ、しかも

外国との交流ということで、インターナショナルなものにつながり、学生や研究者をひきつけるだけの魅力を十分に備えているといえる。国際性という時代の先端をいくものと、地域性という伝統に立脚したものが、同時にみたまれば、それは一石二鳥というべきである。

## 5 ————— あとがき

横浜の特殊性をほとんど知らない「よそ者」が、以上勝手な空想を書き並べたが、横浜に愛着を感じているハマッ子であれば、もっと他にもいろいろと、横浜の特殊性をいかすアイデアは浮かんでくるであろう。そうしたアイデアを掘り出す意味で、一般市民に「横浜の将来ビジョン」について、懸賞論文などを募集してみたらどうだろうか。おそらく貴重なアイデアもいくつかでてくるだろうし、仮りに使いものになるようなアイデアが全然でてこなかったとしても、一般市民に、自分たちの住んでいる地域の将来について、考えてみるチャンスを与えることだけで、すでに市民意識を培う副作用はあるのである。